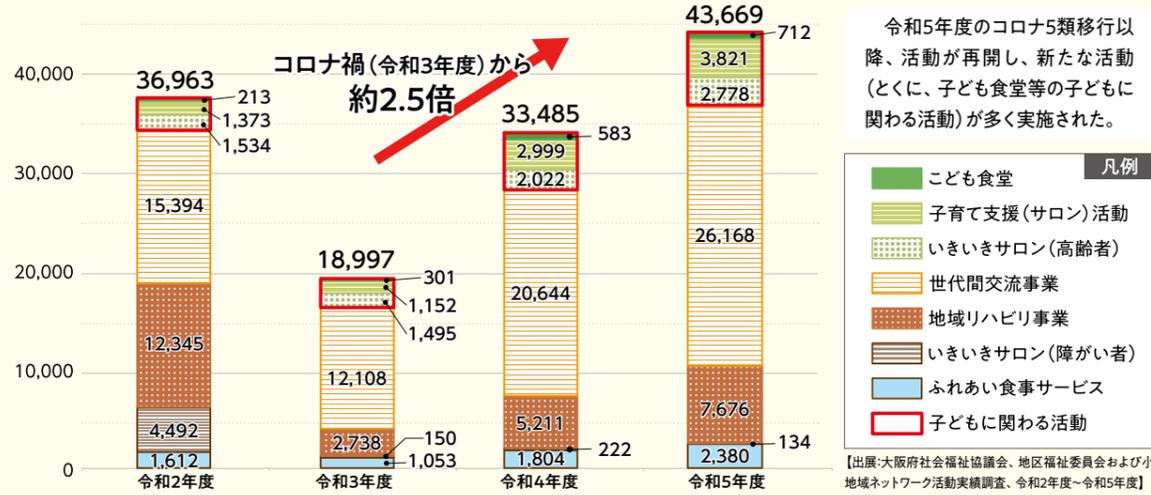


地域でとりくむ居場所の“イマ”



当事者が作成した手芸作品が共同募金のカチャガチャの景品に(泉佐野市)

共に生きる社会をつくる

令和6年4月1日に、孤独・孤立対策推進法が施行され、切れ目のない相談支援、連携強化、人と人とのつながりを実感できる地域づくりが求められています。

今号は、病気、失業、親の介護、経済的な問題などがきっかけで孤独・孤立を感じてしまった当事者の思いと、本人に寄り添い、その人らしい暮らしを支え、“共に生きる社会”をつくる、泉佐野市(4・5面)と池田市(6・7面)の実践を紹介します。

● 当事者の組織化と参加支援
泉佐野市社会福祉協議会

きっかけは当事者の「声」

泉佐野市社協では、令和元年度から生きづらさを感じている人々のつながり事業「縁起プロジェクト」(以下、プロジェクト)を社協の独自事業としてすすめています。プロジェクトの対象は、ひきこもりがち、コミュニケーションが苦手、敏感すぎて疲れてしまつたなど生きづらさを感じているすべての人です。スタートするきっかけは、令和元年度から社協が生活困窮者自立支援事業を受託するようになり、その事業の就労準備支援講座の参加者から「仕事のことだけでなく、参加者同士で気軽に話したい」という要望があつたことでした。社協が当事者のニーズを受け止め、カタチにすることで、取り組みがすすんできました。

安心・安全な場所をつくる

プロジェクトは、人とのあい・つながりから、自分を発見し、他者との関わりについて学ぶことを目的としています。出入り自由で、安心して自由に過ごせる場所「りれーしょん」、ハイキングなどイベント型のテーマ別活動など

①当事者が安心・安全な場所だと感じ

ることができるよう「居場所づくり」を中心に、②ひきこもり講演会などの「普及・啓発」、③趣旨に賛同し、一緒に活動してくれる「縁起サポーター」の協働の3つを活動の柱にしています。

つながる「場」を求めて

そのプロジェクトに参加する山本さんは、親の介護や経済的な問題が重なり、日常の何気ない話を気軽に話せる人がいないなど、孤立を感じるようになっていました。そんな時、生活困窮者自立相談支援窓口の担当者からのすすめで、秋のハイキングに参加しました。

もともとバイクのツーリングに行くのが趣味だった山本さんは、自然が好きなことからという気軽な気持ちで参加を決めました。参加してみると、初対面でもメンバーが気軽に話しかけてくれ、マイペースでいられる気を遣わない雰囲気、居心地のよさを感じることもできました。そしてその後も少しずつですが、当事者同士の交流会や他団体が主催するひきこもりの講演会に参加するようになりました。

講演会のチラシを見て、自分がひきこもりの状態ではないかと思つた。似たような経験をもつ人々がつながる場所に行くことで共通の話題を話せる人を求めている」と参加した時の思いを山本さんはふりかえります。

新たな発見につながる

「参加者のすてきなところを見つけ、伝えていくようにしています」と語るのは、事務局を担う泉佐野市社協の朝熊祐子さんと印具政弥さんです。当事者のできていないことに当事者自身も支援者も注目しがちですが、人となつがることで「ありのままの自分」でいいと気づき、当事者が主体的に生きることを支援しています。

また、プロジェクトは生活困窮者自立支援事業と連携しています。生活困窮者自立支援担当者が当事者と深く関わる機会が増えたことで、面談室だけでは見えない本人の希望や思い、強みを発見することができ、その人らしい就労支援ができるようになりました。

共に活動する・支えあう

生きづらさを解消するためには、当事者への支援だけでなく、社会全体の理解の輪を広げていく取り組みも必要です。社協では、理解がある企業や団体、個人をプロジェクトにつないでいきます。縁起サポーターのAさんは、手芸やお菓子づくりなどの講師として、活動を支えているうちのひとりです。

はじめは何をしていいか戸惑つこともありました。昨年のクリスマス会前

生きやすい「社会」をつくる

今後は、当事者自身が主体となり活動をつくっていくことができるよう、当事者会の立ち上げを検討しており、現在は、プレ当事者会をスタートしています。

「自分の知識と経験が誰かの役に立つのなら、今後も協力していきたい。孤立・孤独の状況は個々で違つたので難しい面もあるが、誰もが自分らしくいられる居場所を持続的につづけていきたい」と山本さんは、今後の抱負を語ります。

当事者、地域住民、専門職の力を結集してすすめる泉佐野市社協の今後の取り組みがさらに期待されます。



左から印具政弥さん、山本さん、朝熊祐子さん



栄養士とボランティアのみなさん



栄養士が調理する
インドネシア料理は大好評！

で働くインドネシア出身の職員が孤立している状況を聞き、ほかに孤立している外国籍の方がいるのではという課題意識から、その方達も地域の親子もみんなが参加できる食堂をつくりました。

調理は栄養士会に協力を依頼し、社協のフードドライブの食料や、他団体からの助成金を活用するなど、これまでのつながりや資源を生かし、力を結集してすすめています。西井さんが支援した親子も参加し、外国籍の方も



ほほえみ食堂アジア

相談支援から参加支援、地域づくりへ

- 社会福祉法人起生会 ほほえみの園
- 池田市社会福祉協議会

地域とともにつくる

「地域共生社会が求められる中、社会福祉法人として地域といかにつながることができると考え、取り組みをすすめてきました」と語るのは、社会福祉法人起生会 ほほえみの園 施設長の山田直輝さんです。

これまでに、高齢者施設の利用者子どもたちがふれあえる「ほほえみ子ども食堂」や、「コロナ禍の食料支援事業（フードドライブ・フードパントリー）」など、社協をはじめ、地域やさまざまな団体とつながることで、地域における公益的な取り組みをすすめてきました。

その中で、制度の狭間にある人々への緊急支援を行う「大阪しあわせネットワーク」でも施設にCSWを配置するなど積極的に参画しています。

すべてを受け止めるCSW

「みんなに生かしてもらった命。感謝しかありません」と語るのは、ほほえみの園のCSW西井美月さんが支援しているBさんです。

Bさんは、幼い子どもを抱え、病気で

ランディアとして活動を支えるなど、交流が生まれ、誰もが支えあう居場所として、毎回大盛況です。

山田さんは、その人らしくいられる居場所や孤立・孤独を防ぐ取り組みを自施設だけではなく、市域全体で広げていきたい」と今後の展望を話します。

連携・協働が重要

池田市社協CSWの貝原利江さんは、「社会的に孤立する人も増えているが、当事者だけでなく支援者も孤立している。地域の中に社会資源はたくさんあるが、当事者も支援者も知らないもしくはつながっていないという課題もある。だからこそ、当事者も支援者も『誰か』とつながる孤立しない地域づくりを進めていくことが大切」と話します。

貝原さんは社協CSWとして、支援が必要な人と支援者をつなぐだけでなく、支援者同士をつなぎ、地域の中で課題を抱えた人を受けとめる人や社会参加の機会や場をつくるための支援を行い、孤立しない地域づくりをすすめています。

ほほえみの園の西井さんは、「高齢分野以外の制度やサービスについても気軽に教えてもらえるなど、日頃から連携してくれる社協CSWの存在は大きい。緊急的な支援で終わるのではな

経済的な問題に悩み、追いつめられたすえに警察に助けを求めました。Bさんを支援していた他市の相談支援機関から西井さんに連絡が入り緊急で訪問しました。

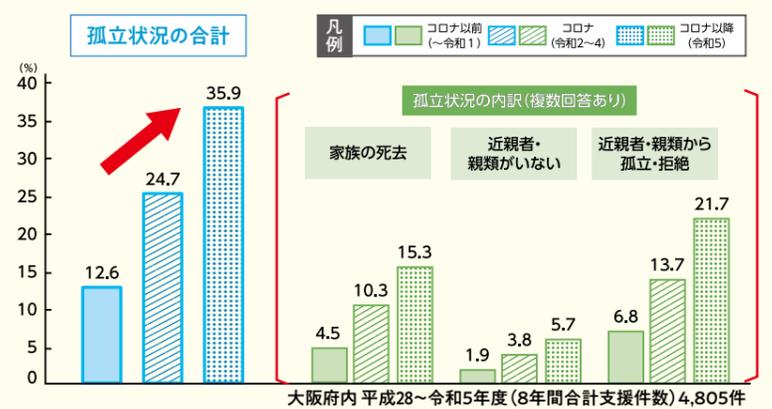
「すべてを肯定的に受け止めてくれる西井さんの笑顔に救われました」と、Bさんは西井さんとの出会いをいかりかえります。

西井さんがはじめての訪問で大事にしていることは、受容すること。緊急的な支援には、CSWとしての迅速で適切な判断が求められますが、やわらかい表情で、本人の困っていることをいねいにひきだせるようにしています。経済的援助（現物給付）も検討しましたが、制度やサービスにつながることで、経済的な問題は一旦解決することができました。

現在Bさんは、病院受診をし、体と心を休めながら、少しずつですが、施設が行うさまざまな活動にボランティアとして参加しています。西井さんは、「失敗してもまた一緒に考えたい。人とのつながりをつくることで、就労



大阪しあわせネットワーク～孤立状況の推移～
近親者・親類からの孤立・拒絶などの孤立状況は、コロナ禍以降も深刻化していることが支援事例の分析で分かりました。



分析作業委託先: (株)電通マクロミルインサイト、(株)アイ・シー



左から西井美月さん、山田直輝さん、貝原利江さん

孤立しない地域をつくる

く、継続して伴走していく土台をつくり、社協とも連携しながら支援していきたいです」と話します。

多様な人とのつながり、地域の課題などを共有し、協議することを大切に

支え・支えあう居場所を

ほほえみの園では、令和5年度から、外国籍の住民を地域で孤立させない、多文化共生を目的とした「ほほえみ食堂アジア」を開催しています。自施設

てきた池田市社協では、住民、当事者、団体、企業、行政など多様な主体とともに具体的なプロジェクトを生み出すため、「共生のまち、いけだプラットフォーム」をスタートしています。「ひとりじゃないよ」のメッセージが伝わる、孤立・孤独を防ぐための池田市の取り組みはこれからもすすんでいきます。